

ボ

六〇年代の終わり、寺山修司が「書を捨てよ、街に出よう」と叫んだとき、皮肉にも日本の若者は、あべこべに、個室にこもろうとしていた。ラジオの深夜番組も、公営式も、ラジカセも、コンビニも、ファミコンも、ひきこもりも、携帯も、インターネットも、みんなそのあと始まった。

郊外には規格どおりの住宅が立ち並び、リビングのとなりはダイニング、アルミサッシにカーベットと、ドアを開けなくても知れている。それなら人生は、始めないうちから先が見えていよう。

こうした無重力の空虚のなかで、「ヒマしてる」「退屈な」若者たちは、個室の外へと繰り出してゆく。彼らのイメージする路上とは、繁華街で、彼らがすれちがう場所のことだ。ちょっとしたファッション小物か、ガジェットか、ブランド品を身につけて。六〇年代までの若者は、家を出た。いまの若者は、家に帰る。帰る家のないホームレスを、彼らは恐れる。

路上にいつつける必要のない彼らのパフォーマンスは、素人芸である。毎日通るハーバード・スクエアと比べてみるとよくわかる。ボストンでも観光客の多いこの辺りは、「小銭を下さい」という物乞いにまじって、やたらとうまい中南米音楽のバンド、ビートルズの詩人、ロックシンガー、黒人のバンジョー弾き、ただ縦笛を鳴らしているだけの芸のないおっさんと、年齢幅がぐんと広い。ジャンルも人種もまちまちだが、共通しているのは路上でなりわいを立てている人びとだということだ。地下鉄にも、駅のぬしのようなミュージシャンが居すわっている。

日本の路上は、なぜ、こうも軽くなったのか。それは、「書を捨てた」からだ。書を捨て、知の権威を投げ出しても、若者は自由にならなかった。代わりに情報が、彼らをからめ取った。情報は同時代に伸びるアンテナだから、厚みのない躁状態をつくり出す。情報をどのように捨てるか、これが問題だ。

橋爪大三郎
(東京工業大学教授・社会学)

おまけ

平成12年1月3・13日合併号 (毎月1・3・13・23日定期発行)

全私学新聞

選択・責任・連帯の教育改革(完全版)

橋爪大三郎編



(勁草書房 本体価格一、八〇〇円)

学校の機能回復をめざして

いい。

編者は「日本の教育から一人ひとりの個性ある人間を救い出すこと。そして、めいめいが生きる希望と目標をもつて学校で過剰させるように、制度を改めること」

「選択」し、選択の結果に「責任」を持つ。教師はこの「選択」に応じて、プロの教育者としての役割を果たす。親・子供・教師たちの自主性を最大限に尊重する。この学校を核とする「連帯」を築き上げることに必要性を本書は述べている。

本書は財団法人社会経済生産性本部が昨年七月に公表した教育改革に関する報告書「選択・責任・連帯の教育改革——学校の機能回復をめざして——」の全文で構成されている。

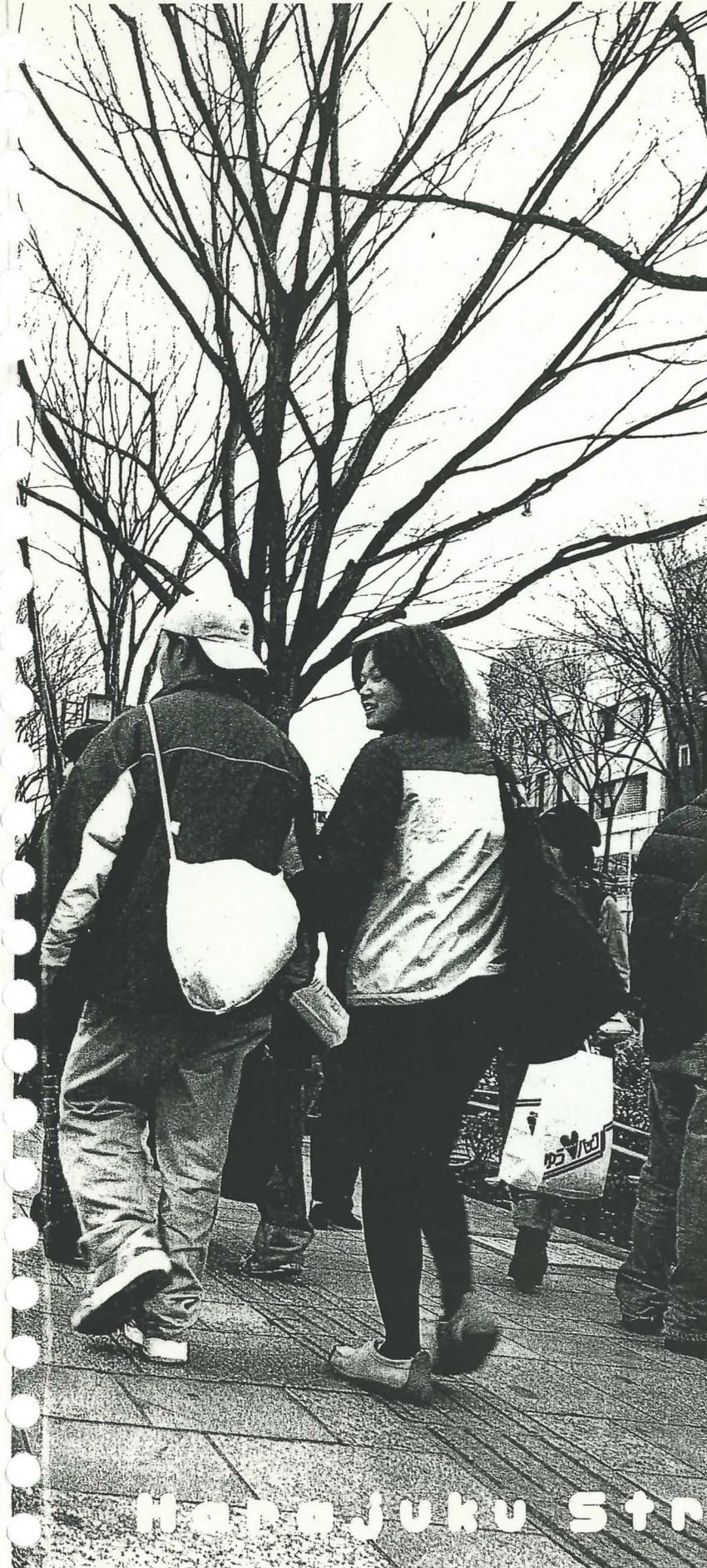
この報告書は、同本部の二委員長が、平成九年から三年にわたって進めてきた検討作業の集大成といえる。

「選択」し、選択の結果に「責任」を持つ。教師は一人ひとりの個性ある人間を救い出すこと。そして、めいめいが生きる希望と目標をもつて学校で過剰させるように、制度を改めること。

「連帯」を築き上げることに必要性を本書は述べている。

それは従来の教育改革が、だれが教育の主体になるのか、はっきりしなかったからだ。教育改革の主体は教育であり、それはまず子供と親ということになる。

教育の主体である子供と親が自分の自由な判断で、どのような教育を受けるかを



Hana Juku Street Snap

ミレニアム特別企画 (掲載は原稿到着順)

21世紀へ—「夢の学校」

悪夢にたち向かう学校

東京工業大学教授 橋爪 大三郎

20世紀がそうであった以上に、21世紀は苛酷な世紀となろう。人口爆発、食糧危機、民族紛争、環境破壊、……。これらの悪夢が、現実となる瀬戸際を歩むのが21世紀だ。教育の機会(学校)も、ほかの資源と同じく、国際的に著しく不平等に配分されている。先進国が「夢の学校」を追い求めるだけでは、発展途上国は地獄に苦しむことになる。

20世紀の教育、特に初等・中等教育は、立派な国民となるための教育に重点を置いてきた。大学や大学院の一部が、世界を意識した教育を行なったにすぎない。これが間違いだったとは言わないが、結果的に、外国に職を求める可能性は狭められてしまった。

EUは、域内の資格を共通にして、どの国でも働ける権利を保証しようとしている。21世紀にはこの考え方が、地球大に拡大する必要がある。その国の国語や文化を学ぶと同時に、国際社会に通用する知識や技術を身につける。先進国は、発展途上国の人びとに、移住と就職機会を開く。小中学校からそれに取り組まないと、悪夢が現実のものになってしまうかもしれない。

知^{りたい}読^{みたい}

教育勅語・教育基本法

「選択・責任・連帯の教育改革」(堤清二、橋爪大三郎編、勁草書房)は社会経済生産性本部が九九年まとめた改革案。特に堤、橋爪氏と大澤真幸氏が参加した巻末の対談が示唆に富む。堤氏は年配者が教育を語ると過度にエモーショナルになる、といい、大澤氏は戦後、屈折した形で与えられた理念をもう一度、選り直し、引き受け直す必要性を述べている。

これからの学校経営に必要な校長の経営力とリーダーシップ

「民主主義」の学校教育

東京工業大学大学院教授

橋爪大三郎

戦後日本社会には、いろいろ批判もある。ひとつ確かなのは、「民主主義」をかけがえのない財産として、将来の世代に継承していかなければならないことである。

では「民主主義」を、学校教育の場で、どのように次の世代に伝えるか。

それは教室で「民主主義」とは何かを教えることではない、と思う。

社会科の時間に、主権在民や三権分立の原則を教えることではない。戦争の惨禍や人権の大切さを教えたり、差別や環境問題について説明したりすることでもない。まして、政府に反対することでも核兵器に反対することでもない。

クラス委員を選挙したり、生徒会を自分たちの手で運営したりすることも、やらないよりましかもしれないが、決め手にはならない。

それは、学校の組織・運営のやり方全体を通じて、じわりじわりと若い世代の人びとに吸収されていくはずのものである。「民主主義」とは、知識ではなくて態度、生き方なのである。

学校の組織・運営と「民主主義」は、どのような関係があるか。

近代社会を成り立たせるのは、民主主義（デモクラシー）と官僚制（ビュロクラシー）

である。

近代社会は、個々人の自己決定を最大限に尊重する。誰もが、自分のことは自分で決める。自分で決められないのは、ほかの人間の意思決定である。そこで、多数の人間に関わることがらを決めるには、多数の人間の意思決定を、公正なやり方で合成する手続き、すなわち「民主主義」が必要になる。およそ公職と名のつくポストをすべて選挙で選ぼうとするアメリカのような社会から、それほどでない社会までいろいろあるが、大事なことほど投票で決めるのが原則だ。

いっぽう官僚制は、多数の人間から成り立つ組織が、効率よく仕事を進めるための仕組みである。権限と責任、ヒエラルヒー、予算制度、文書主義、等。学校も近代的な組織である以上、こうした官僚制の枠組みのなかで動いている。

問題は民主主義と官僚制とが、水と油のように、まったく異なる原理でできていることだ。みんなで決める民主主義と、トップが決める官僚制。官僚制が主流となって、民主主義が弱ければ、「権威主義」的な社会になる。逆に民主主義ばかりで官僚制がなければ、「アナーキー」な社会となる。民主主義と官僚制を適切に組み合わせて社会を運営するこ

とが、近代社会の永遠の課題である。

*

さて、家族は、民主主義でもなければ官僚制でもない。家族のなかで、近代社会の仕組みを学ぶことはできない。そこで、親のもとを離れ、小学校に入学した児童は、はじめて社会とは何か、民主主義とは何かを学ぶことになる。

デパートの玩具売り場で、ポケモン・カードが欲しいとわめいている子どもを考えてみよう。親は、よし買ってやろうとか、ダメだよとか言うかもしれないが、「予算がないから買えません」とは言わない。子どもと親のあいだに、人間対人間としてのやりとりがある。だから教育（しつけ）ができる。ところがえてして学校では、予算がないから、権限がないから、規則だから、といった対応をしなければならなくなる。自分で意思決定をする人間が消えている。人間がそこにい（ると

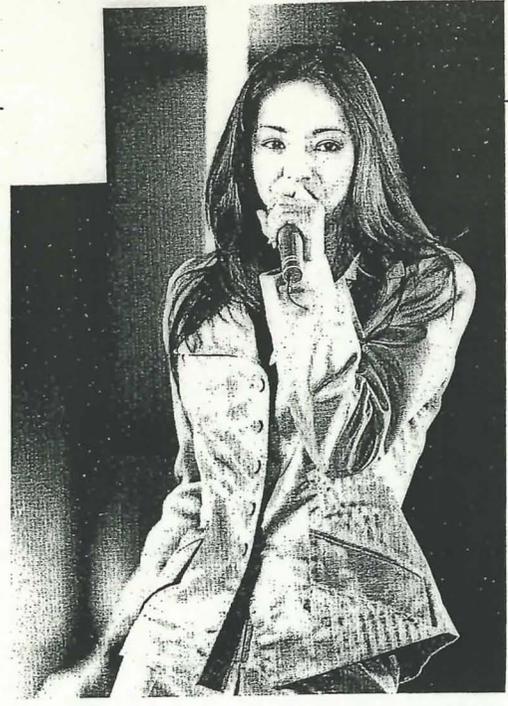
感じられ）なければ、教育は成り立たない。

校長や教頭の役割は、学校が官僚制の原理で運営されていても、なおそこに人間としての顔、人間としての善意がこもっているのだと、人格をもって示すことにある。規則をたてにとって責任逃れをするかわりに、教育の原点にたちもどって、人間個人としての判断を示すこと。彼（女）がトップにいるから大丈夫だという信頼感が、学校の組織・運営のやり方を通して、にじみ出る。それを通じて、近代社会に対する信頼、民主主義に対する信頼が、若い世代の人びとのあいだに湧いてくる。こうでなければならない。

そのためにも、校長は官僚組織（いまのようなかたちの教育委員会）の末端で管理されるのではなく、たとえば、選挙で選ばれた学校理事会に任命される、というようなかたちに改めることが望ましい。さもないと、民主主義は教えられないと、私は言いたい。

安室 奈美恵

歌手



歌う安室奈美恵。96年2月のゴールデンアロー賞受賞パーティーで

子どもから老人まで、アムロの歌に熱狂

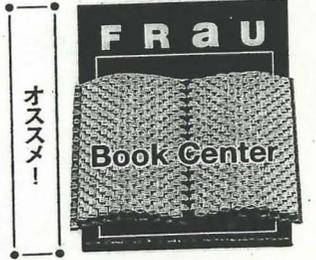
沖縄アクターズスクールで歌と踊りをトレーニング、上京してデビューを果たしてからの安室奈美恵さんは、時代を全速力で駆け抜けていった。かつての山口百恵さんのように、人びとの心にシルエットとして焼きついている。

時代もテクノロジも、刻々と前に進んでいるのに、経済や政治や大人たちだけがなぜ停滞したままなのか。そんなじりじりした90年代の感覚を、彼女は小気味よくシャウトした。ひとつころコンビニでは、安室さんの歌ばかり流れていたような気がする。小柄で童顔の彼女のバイオリテイに、子どもから老人までファン層も広がった。

97年10月、20歳になったばかりの安室さんが



「はじめての構造主義」橋爪大三郎/人間は言葉の生き物であるということを中心に、言葉が持つ重みや影響の大きさが読みやすく書かれている。講談社現代新書 660円



オススメ!

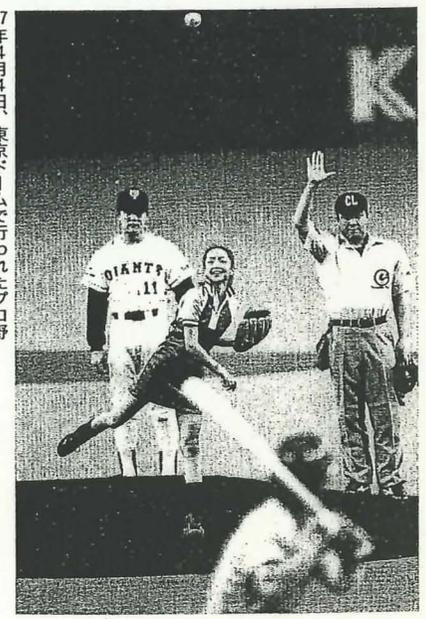
遥洋子 ケンカに勝てる女になる本

プロの本読み、本書きが勧める「いい女になれる本」



遥洋子 タレント。大阪府生まれ。武庫川女子短期大学卒。「新・クイズ日本人の質問」(NHK)等にレギュラー出演中。「東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ」(筑摩書房)がロングセラー。最新作は9月末発売予定の「結婚しません。」(講談社)

言葉の持つ力について言及しているのは『はじめての構造主義』。例えば「それは伝統です、文化です」と言われたら「そうか」って思いがちなんですけども、じゃあ伝統って誰が作った言葉なのか、変わらない文化ってあるのか。当たり前とされていることが、実際は大変曖昧なものなんだというところまで考えさせられる1冊です。



97年4月4日、東京ドームで行われたプロ野球公式戦開幕試合、巨人・ヤクルト戦で始球式。巨人先発の斎藤雅樹投手の前で、ストロークが内蔵された光る特製ボールを投げた

安室さんの結婚は、若すぎる、もったいないなどの声があつた。そんなことより、私は彼女の決断を立派だつたと思う。それは、妊娠がはつきりした時点で、結婚して出産と育児に一年間専念する、仕事はその間休む、とためらわずに決心したからだ。当たり前のようにだが、過去、売れっ子の独身女性歌手が、出産のために休業した例はなかった。周囲の圧力で心ならずも出産をあきらめ、歌手の仕事が続けたケースが多かつたのではないか。自分の幸せを後回しにするのが、この業界のおきてだつた。

安室からアムラーへのメッセージ

安室さんの結婚は、これに風穴をあけるものだ。彼女はもともと「私から音楽をとったら何も残らない」と言うほど、仕事に打ちこんでいた。そのいつばうで幸せな家庭を築くことにも、なぜか自信だけはあると言う。歌手と家庭の幸せをバランスよく両立させる。強い意志と、人一倍の努力がなければできないことだ。人びとは、安室さんならできると声援を送った。安室さんの行動様式は、よい意味でアメリカ

的(個人主義的)だと言える。歌や踊りだけでなく、思い切りのよさにそれを感じる。安室さんのファッシュョンを追いかけてきた「アムラー」たちもそのように行動できるのだろうか。

安室さん自身も、ジャネット・ジャクソンやマライア・キャリーを目標に、それを追いかけて走ってきた。しかしいつの間にか、大勢のアムラーが現れ、彼女が追われることになった。追われる側になれば、追いかけることの空しさがわかる。時代の頂点に立つた彼女は、追う／追われるというゲームをやめ、自分に立ち戻る歩みを始めたのであろう。トレードマークの長髪をばつさり切つたのはそのサイン。それはアムラーたちへのメッセージ、最大の贈り物だつたのではないか。(橋爪大三郎)

あむろ なみえ
本名同じ。1977年9月20日、那覇市生まれ。92年、グループ「スーパーモンキーズ」の一員としてデビュー。95年、安室奈美恵Withスーパーモンキーズでリリースした「TRY ME」が大ヒット。95年7月の「Stop the music」からソロ活動に入り、ミリオンヒットを連発。96年、史上最年少の19歳3カ月で、「Don't wanna cry」で日本レコード大賞を受賞。翌年「CAN YOU CELEBRATE?」で連続受賞。97年結婚、出産のため1年休養。98年末のNHKの紅白歌合戦で復帰。

明かりのともっている家ついでいいですね

安室 奈美恵

新しい社会理論の構築を目指す

橋爪 大三郎著 言語派社会学の原理

今日、言語や言説の作用に着目しながら社会現象を分析する方法は、社会学のなかで一定の市民権を得ているが、この

基本枠組を提示する

ミクロとマクロの対立を乗り越えて

正村 俊之

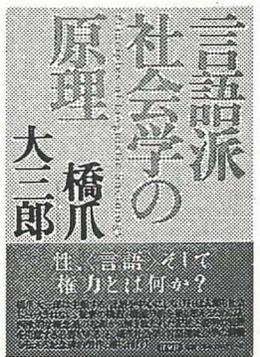


橋爪 大三郎氏

ような状況は、二三十年前にはとても考えられなかった。たしかに、言語が人間を特徴づける本質的な要素であることは、誰もが知っている。しかし、言語は、あらゆる社会現象に通底する要素であるゆえに、かえって個別の社会現象を分析する際にはほとんど無視されてきた。そうした(日本の)学問的状況のなかで、言語の重要性をいち早く洞察したのが橋爪氏であった。「言語派社会学」の理論は、これまでさまざまな

力」について論じたものである。「言語派社会学」は、言語という基礎的な要素から出発するだけに壮大な構想

る。そうした既存の社会学を根底から問い直し、近代社会との関連をいったん断ち切ったうえで新たな社会理論を構築しようというのが「言語派社会学」のプログラムである。例えば、意味を重視する主観主義と、意味を無視した客観主義との方法的対立は「個人(ミクロ)と社会(マクロ)」、「意図と因果」等々といった、近代社会に固



46判・305頁・2900円 洋泉社 4-89691-479-1

ていく。そのうえで権力に焦点があてられ、権力源泉、権力線、権力制度など、権力の

さまざまな側面が分析されていく。ここでは、ミクロとマクロの対立を乗り越えて、この方法論的対立を乗り越えようとする。ここでは、「性」「言語」「権力」が基本概念として据えられ、三つの作用をもとにして、社会空間の主要領域である親族、政治、宗教、経済、法が捉え直され

議論は、そこから権力の制度へと進められていくが、そのなかで権力をめぐるアリアの解決がはかられる。ミクロとマクロの二つのレベルにまたがっているところにして、権力の本質があることを考えるならば、橋爪氏の議論は、今後の権力論の展開に一石を投ずるものとなる。現代社会はあまりに複雑であるために、現代社会を理論化することは難しいが、そうした状況にあつては、橋爪氏は、ミクロな権力論の限界を突破しようとする。権力者が被権力者に権力を及ぼすとき権力は、

つねに当事者にとって現前しえないもの――本書で「状況」とよばれているもの――に根ざしている。★はしづめ・だいさぶろう氏は東京工業大学教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「言語ゲームと社会理論」「はじめての構造主義」「橋爪大三郎コレクション」(I~III)、「性愛論」「橋爪大三郎の社会学講義」など。一九四八(昭和23)年生。

21世紀の思想を探る⑥

言語派社会学とは何か

講師 東京工業大学教授 橋爪大三郎

社会をもっとも根本のところから科学的に考えていこうとすると、さまざまな方法上の困難がまきおこってくることに気づく。それを筋道立てて解きほぐしていくには、社会にとって普遍的であるもの(sociological universals)が必要になる。そうしたものの根底に、私は、言語、性、権力の三つを想定すべきだと考える。これらは人びとの身体を関係づけ、そこに社会を可能ならしめる作用素なのである。そして、それらのうえに、あらゆる社会現象と制度が可能になっていると考えたらどうであろうか。

この夏の近著「言語派社会学の原理」の前提や、その背後にある構想を明らかにするように、話をしてみたいと思う。(講師記)

- 日時 2000年12月10日 1回 日曜 13:00~15:30 (質疑応答の時間も含む)
■受講料 会員 3,300円 一般(入会金不要) 3,800円
※受講料には、消費税5%が加算されます。
■場所 ルミネ横浜8階(横浜駅東口)

<講師紹介>はしづめ だいさぶろう 1948年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。著書「言語ゲームと社会理論」勁草書房、「はじめての構造主義」講談社現代新書、「性愛論」岩波書店、「橋爪大三郎の社会学講義」夏目書房、「言語派社会学の原理」洋泉社ほか、多数。



朝日新聞の文化活動 朝日カルチャーセンター・横浜 〒220-0011 横浜市西区高島2-16-1 ルミネ横浜8F 電話(045)453-1122(代)

短信

言語派社会学の原理 橋爪大三郎著 「言語派社会学」という言葉は、著者が独自に作りあげたものだ。従来、社会学が自明視してきた基礎概念に頼らず、言語を中心に人間や社会をどう直す。権力とはどういう存在なのか。性とは何か。理論社会学が抱える、一般性・実証性のギャップをふまえて、構造機能分析にかわる理論を社会学者として提起する。(洋泉社・二、九〇〇円)

朝日新聞 読者 2000.11.26(日)

ここに、『ポピュラー音楽研究』第3号をお届けする。

本学会が旗揚げした当時、ポピュラー音楽の研究はまだほとんど認知されておらず、会員のなかで大学などに職をえている者もわずかだった。以来、少しずつ社会の理解もえられるようになり、専門にこの道を志す若い世代の人びとも増えてきた。本学会がこの雑誌を創刊したのも、ポピュラー音楽研究の分野での意欲的な研究成果を、社会に還元するためのパイプを持ちたいという、会員の熱意の表れだった。

とは言え、事務や編集の態勢を含め、この学会がまだまだ発展途上であることは否めない。ボランティア・ベースでことを進めているため、本号も予定よりかなり遅れて、読者の手元に届くことになった。お詫び申し上げますとともに、今後ますます活発に研究が行なわれ、より多くの論文が本誌に投稿されることを望んでやまない。

(橋爪大三郎／理事・会長)

今年の執筆予定

アンケート

到着順

◎ 橋爪大三郎

社会学

昨年は在外研究中に書きためた懸案の本を何冊か出版できてよい一年でした。二〇〇一年は、まだ残る懸案の書き下ろしや、インタビュー、対談録、宗教学の講義録などを出版できれば、と考えています。それが済んだらいくつか新しいテーマにも取り組んでみるつもりです。

2000-3-31